

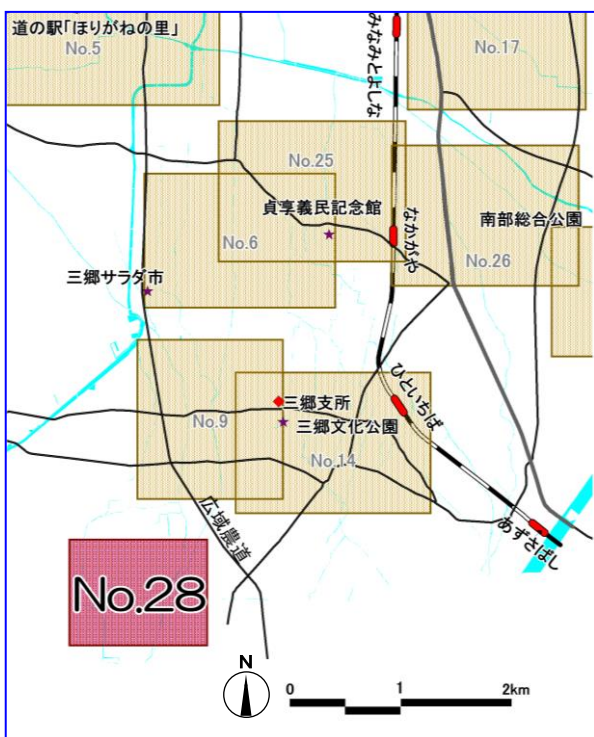
安曇野の原風景を巡る ふるさとウォッチングマップ

No.28

三郷野沢地区

—蚕種の生産がもたらした豊かな実り—

安曇野市の南部に位置し、本棟造の民家群と屋敷林が連なる緑豊かな集落です。扇状地の扇央部で荒れた土地でしたが、梓川からの縦堰に沿って耕作地と集落を拡大、さらに明治時代以降にはクワの生産に適した土地条件と技術開発で蚕種を増産。先人たちが土地からの実りを活かして作りあげてきた往時の工夫や苦勞の痕跡を各所で学び、知り、肌で感じることができます。



**NPO法人 安曇野ふるさとづくり応援団
安曇野案内人倶楽部**

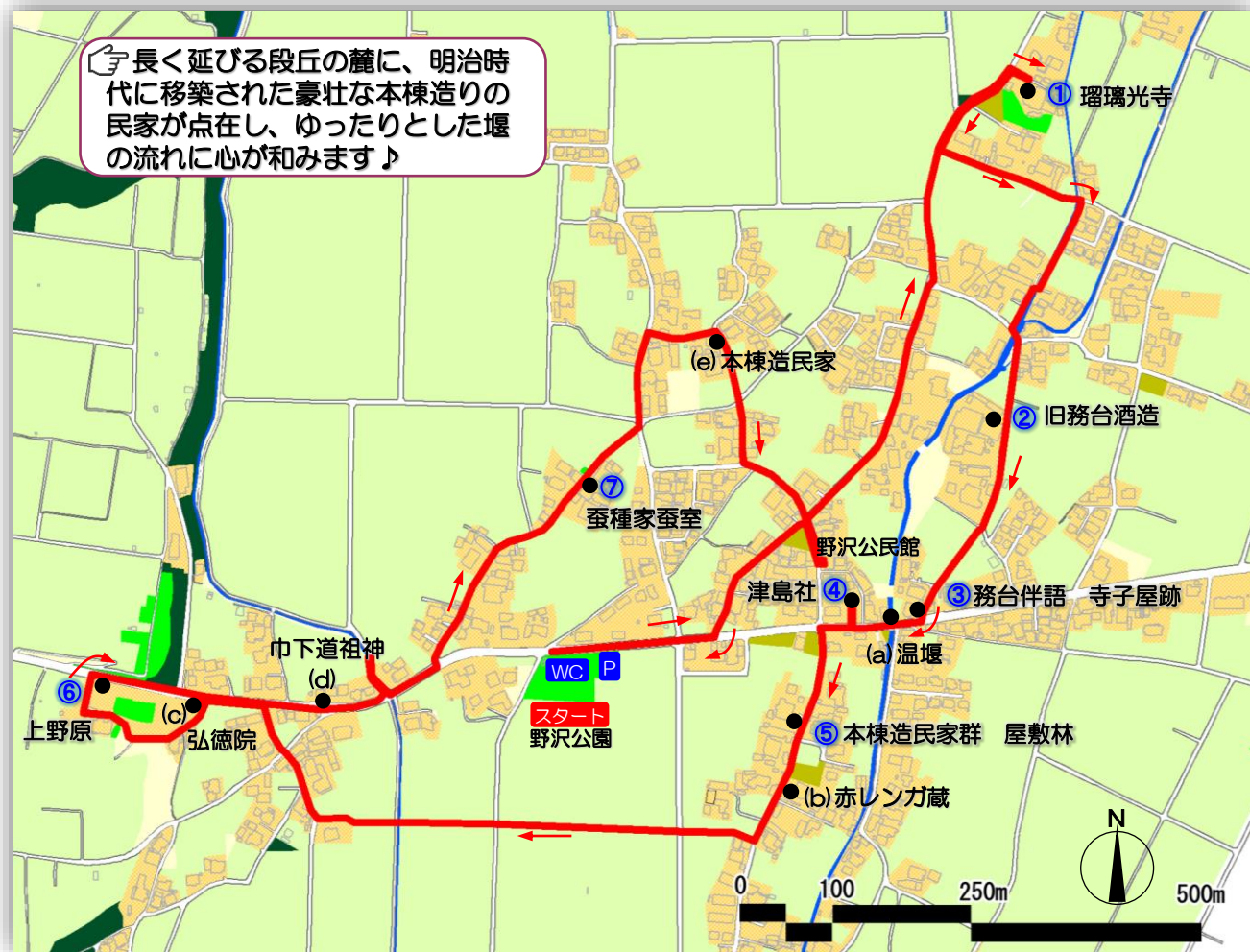
※本マップは下記のサイトからダウンロード可能です

<http://azumino-sanpo.info/>

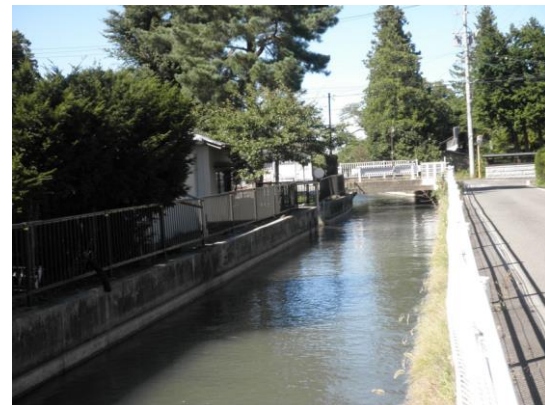
◆コースタイム ※時間は歩速3km/時としての目安です（休憩含まず）

スタート 野沢公園→約0.4km＊8分→野沢公民館→約0.6km＊12分→瑠璃光寺→約0.6km＊12分→旧務台酒造→約0.5km＊10分→本棟造民家群屋敷林→約0.9km＊18分→弘徳院→約0.9km＊18分→蚕種家蚕室→約0.1km＊2分→本棟造民家→0.6km＊12分→野沢公園 **ゴール**

【合計】約4.6km：1時間32分



長く延びる段丘の麓に、明治時代に移築された豪壮な本棟造りの民家が点在し、ゆったりとした堰の流れに心が和みます♪



(a) 温堰
三郷に恵みを与えた温堰(ぬるせぎ)



(b) 赤レンガ造文庫蔵
小澤家・赤レンガ造文庫蔵



(e) 本棟造民家
本棟造民家 西沢家



(d) 巾下道祖神
双体祝言像。「帯代十両」との添彫



(c) 赤坂の弘徳院
務台一族の菩提寺

【注】マップ内の情報はふるさとウォッチングを開催した2019年4月14日現在の内容です。

① 瑠璃光寺

前身は薬師堂で、明治6年(1873)の「野沢村地図」ではその四囲が濠で囲まれていました。廃仏毀釈で廃堂となりましたが、最後の庵主であった璉堂の奔走により、明治14年(1881)に無量山瑠璃光寺として創建されました。山門(鐘楼門)は明治28年(1895)に完成、平成7年(1995)に本堂が新築落慶し今日に至っています。本尊は薬師瑠璃光如来です。



瑠璃光寺鐘楼門

② 旧務台酒造

明治3年(1870)頃、務台酒造店として創業しました。昭和36年(1961)に飯野屋、亀屋酒造と合併し、酔園銘醸株式会社となり、平成15年(2003)には豊科・高家に本社・工場をおくEH酒造へと発展しました。大正6年(1917)に建設された酒蔵は、東西に大きな三棟が連なり、東から瓶詰め場と貯蔵庫、一番西に仕込み蔵、麴蔵、発酵蔵が並んでいます。



旧務台酒造の酒蔵

③ 務台伴語寺子屋跡

務台伴語は天保3年(1832)、父久兵衛の開いた寺子屋を18歳で継ぎ、34歳で独立してこの地に新たな屋敷を構えて寺子屋兼住宅としました。以後40年にわたり近郷各地からの子弟に読み書き・算盤、儒学、插花・謡曲・俳句などを教授し、「ごしょうさま」と慕われました。現在の建物は当時の建物の外見と様式を踏襲しています。



寺子屋師匠務台伴語宅・温知学校跡

④ 津島社

本社津島神社は愛知県にあり、その祭神は素戔鳴尊(すさのおのみこと)で「津島様」と呼ばれています。野沢の津島社の創立年代は定かではありませんが、本殿は弘化3年(1846)建替、拝殿は明治20年(1887)に造立されました。また、明治以降の養蚕・蚕種業の発達により、大正14年(1925)には「養蚕神」(蚕玉様)の石碑が建てられました。



津島社本殿・拝殿・養蚕神

⑤ 本棟造民家群 屋敷林

この一角には広大な屋敷地と屋敷林を有する本棟造りの大型民家が三棟あります。いずれも明治時代に安曇村などの他地域から移築された豪壮な建物で、かつての蚕種家(種屋)の経済力を象徴しています。屋号「古屋」の小林家住宅は明治29年(1896)移築、八間×八間で、平成20年(2008)に行われた改修工事がかつての「雀踊り」が復活しました。



本棟造民家群と屋敷林

⑥ 上野原扇状地遠望

段丘崖を上ると黒沢川および本神沢が形成した「上野原」とよばれる扇状地面が広がります。江戸時代は松本藩の藩有林で、明治以降に官林から国有林となりました。大正から昭和初期にかけて開墾され大部分が桑畑でしたが、昭和30年(1955)前後からリンゴ栽培への転換が進み、昭和50年代には矮化栽培普及によりリンゴの栽培面積が急速に拡大しました。



上野原の扇状地と果樹園

⑦ 蚕種家中田屋蚕室

蚕種製造家(種屋)では蚕種採取用蚕の蚕室のほかに、蚕種製造室や冷蔵室などが必要でした。飼育される蚕は、「病気の発生率が低く、合格率が高い」ことが条件で、そのために食べる桑は、砂礫地で栽培される葉面が小型で硬い葉質の「歩桑」が必要とされました。隣接する本棟造りの母屋は明治時代に建てられ、中田家の屋号は「農桑館」でした。



蚕種製造・中田家の蚕室

養蚕

明治時代に入り、生糸の輸出が増加し各地で養蚕業が急速に発達しましたが、気温が高い夏季の秋蚕の飼育に必要な蚕種(さんしゅ：蚕の卵)の確保が課題でした。明治初年には中萱村の藤岡甚三郎が稲核の風穴や地下の穴蔵に貯蔵した氷を利用した「氷室」による蚕種保存および孵化の実験を重ねた結果、秋蚕種製造に成功。南安曇や松筑地域は、養蚕による繭の生産と並んで夏蚕、秋蚕の一大蚕種製造地に発展しました。

蚕種家には雇用人も多く、買付の仲買人や客も訪れたことから、野沢には商店、料理屋、酒蔵等もあり、好景気に沸きました。ここで得られた富が、今も残る豊かな屋敷林や本棟造の民家の礎になっています。



種紙を保存した種箱(左)と蚕の卵を産み付けた種紙(右)
(出典：安曇野きのうきょうあした No3)